

スウェーデンの高校イントロダクション・プログラムにおける教育の個別化

著者	本所 恵
著者別表示	Honjo Megumi
雑誌名	金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要
号	14
ページ	21-34
発行年	2022-03-17
URL	http://doi.org/10.24517/00065760



スウェーデンの高校イントロダクション・プログラムに おける教育の個別化

本所 恵

Individual Optimization in Sweden's High-school Introduction Programs

Megumi HONJO

1. はじめに

現在、すべての人に後期中等教育を保障することは、持続可能な開発目標の一つにも掲げられて国際的に目指されている。しかし現実には高校教育をすべての若者に提供しようとするとき、生徒の進路希望や学力が多様であることへの対応が課題になる。進路に応じた異なる学校種や教育課程は多くの国で用意されているが、学習上必要な支援の多様性への対応には、課題が残されている。日本においても、小中学校での学習内容が身につけていない高校生への学習支援や学習意欲向上の手立てが求められている（中央教育審議会初等中等教育分科会高等学校教育部会, 2014）。本稿では、この課題に対して積極的に教育課程や教育実践の開発を行っている、スウェーデンの高校イントロダクション・プログラム（Introduktionsprogram. 以下、スウェーデンで用いられている略称に倣って IM と表記する）を取り上げる。

スウェーデンでは、6歳から10年間の義務教育を終えたすべての若者に、10代のうちに高校教育を受ける権利が保障されている。高校では「職業や進学、および、個人の成長や社会参画のための良い土台を与える」（Skollag 15kap 2）ことを目的として標準3年間の教育が行われており、多様な進路に対応するために、専門分野の異なる18種類の学科が設定されている。これら18学科は「ナショナル・プログラム」と呼ばれ、全国どの地域に住んでいる若者にも必ず

進路の選択肢として提示される。居住地によって進路選択の幅が異なることがないように定められているのである。

入学するプログラムの決定は生徒の希望が重視され、高校入試は基本的に行われていないが、ナショナル・プログラムに入るには、義務教育を行う基礎学校卒業時の成績（「最終成績」と呼ばれる）で、一定以上の成績を修めている必要がある。そして、最終成績が条件を満たさない生徒が、本稿で検討する IM に入る。

IM は、高校内にありながら義務教育レベルの学習を補完的に行うプログラムである。ナショナル・プログラムには課せられる教育課程に関する全国共通の規定は課されず、かなり柔軟なカリキュラム編成が可能になっている。スウェーデンの公教育では、生徒の異なるニーズに配慮することが非常に重視されており、IM はこの理念を制度的に具体化していると言える。

IM の教育実践の一部は、困難を抱える生徒たちの学習保障・進路保障の場として日本でも紹介されている（本所, 2021; 石田他, 2021）。ただし、IM の具体的な教育課程や教育実践については地方自治体や各学校の裁量が大きく、全体的な状況はつかみにくい。スウェーデン国内では、統計や全国的な調査と、個別具体的な実践に関する調査やインタビューなどを組み合わせ、IM での教育実践の実態把握と評価が行われている。よって本稿では、IM の教育について、関連法規や統計および筆者が行った訪問調査で

(表 1) ナショナル・プログラムと入学要件

		職業プログラム		大学準備プログラム		
		ナショナル・プログラム		児童・レクリエーション	ホテル・観光	経済 人文 社会科学
	電気・エネルギー		工業技術			
	建築・設備		自然資源活用			
	自動車・運輸		レストラン・食材			
	商業・経営		暖房・空調			
	手工芸		福祉・介護			
入学要件	教科数	8 教科		12 教科		
	(内) 必須教科	スウェーデン語, 英語, 数学		スウェーデン語, 英語, 数学 地理, 歴史, 生物, 物理, 社会, 宗教 化学		

出典：Skolverket (2021) Behörighetsregler och meritvärde, Om gymnasieskolan, Utbildningsguiden

(<https://utbildningsguiden.skolverket.se/gymnasieskolan/om-gymnasieskolan/behorighetsregler-och-meritvarde>, 2021年9月20日確認)をもとに筆者が作成

得た具体例から概要を整理した上で、スウェーデン国内での調査研究のレビューを行い、近年の成果と課題を明らかにする。そして、課題を乗り越えるための取り組みについて検討する。

2. ナショナル・プログラムと IM

(1) 入学要件

前述したようにスウェーデンではすべての若者に高校教育が保障されているが、それを提供する的是はコミュニティと呼ばれる基礎自治体である。コミュニティは全国に 290 あり、地区内に居住する 10 代全員の若者に、質のよい高校教育を提供する義務を負っている (Skollag, 15kap. 30 §)。高校生の大半は表 1 に示すナショナル・プログラムのいずれかで教育を受けるが、ナショナル・プログラムへの入学要件を満たさない生徒に対しては IM での教育が提供され、この提供もコミュニティの義務である。なお、高校への入学や通学を拒む生徒に対しても、コミュニティはその若者が 20 歳になるまでフォローアップし、教育や訓練など何らかの活動を提供する義務がある (林・本所, 2021)。

高校の入学要件は、高校卒業後に就職することを主な目標とするナショナル・プログラム

(yrkesprogram : 職業プログラム) と、大学進学を念頭におくナショナル・プログラム (högskoleförberedande program : 大学準備プログラム) とで異なるが、いずれも判断資料となるのは、義務教育を行う基礎学校の最終成績である。

学校の成績は、全国共通に定められた評価基準に沿って A~F の 6 段階で、教員免許状をもつ学校教師がつける。最も秀でた成績が A で、E までが合格、F は不合格である。基礎学校で学習する教科は最小 16 教科だが、この内、職業プログラムに入るには 8 教科以上で、大学準備プログラムに入るには 12 教科以上で、合格にあたる A から E の成績をとっていることが必要である。さらに、これら合格教科の中には、スウェーデン語 (または「第二言語としてのスウェーデン語」)¹、英語、数学の 3 教科が含まれていなければならない。大学準備プログラムには、各プログラムの専門分野に応じた追加の合格必須教科も設定されている (表 1)。

以上の入学要件を満たさない生徒が IM に入る。IM では、高校在籍期間中ずっと学習することもできるが、途中で入学要件を満たせばナショナル・プログラムへ入学することもできる。

(2) 生徒数

生徒数を見ると、2020年秋に在籍していたすべての高校生の内、職業プログラムの生徒は約29%、大学準備プログラムは約59%、IMは約11%だった（SCB, 2021）。ただしこの数値は全学年を合わせた数であり、学年別に見ると様相が異なる。高校1年生（約11万人）に限ると、職業プログラムは約27%、大学準備プログラムは約56%、IMは約17%である。1年生の段階では、全学年を合わせて見るよりもIM生徒の割合が大きいことがわかる。

学年ごとの違いは、IMの生徒数を学年別に見るとさらに明確である。2020年秋のIMの生徒数は、1年生が23,256人だったのに対し、2年生は10,676人と半数以下であり、3年生は6,619人とさらに少ない。この傾向は毎年見られるもので、IM生徒の約半数が1年間の学習で入学要件を満たして2年進級時にナショナル・プログラムに入っており、さらに2年かけて入っている生徒もいることを示している。

(3) 教育課程

IMでの教育を理解する上で、ナショナル・プログラムでの教育との関連が重要になるため、まずナショナル・プログラムの教育課程の構成を踏まえておく。

スウェーデンの高校教育は、すべての教科・科目について全国共通に定められているシラバスに沿って行われる。シラバスには、各教科・科目の目標と主な内容が定められており、評価に関しても全国共通に、各科目での学習到達度に対してA～Fで成績をつけるための評価基準が定められている。ナショナル・プログラムもIMも、教育課程はこのように全国共通のシラバスと評価基準にしたがう科目を組み合わせで編成される。

ナショナル・プログラムには、各プログラム独自の教育目標と教育課程編成の枠組みが定められている。その枠組みは、全プログラム共通の必修教科(プログラムによって量は異なるが、

教育課程全体の4分の1から半分ほど)と、各プログラムの専門教科(半分から7割ほど)と、個人選択科目と、高校での学習の総まとめとして専門分野に関する研究やプロジェクトを行う高校活動(gymnasiearbete)という構成である。

これに対してIMでは、プログラムの教育目標と、教育課程編成の枠組みは定められていない。大きな教育の目的として、ナショナル・プログラムの入学要件を満たすことや就職という方向性はあるが、教育課程上の必修教科もなく、全体の標準履修単位数や教育期間も定まっていない。各生徒のニーズに応じて必要な科目が履修できるのである。

3. IMの4プログラム

IMは、教育の特徴が異なる複数のプログラムに分かれている。生徒が高校入学要件を満たさない理由や状況は多様であるため、ニーズに応じた教育を行うべく、目的と内容の異なるプログラムが用意されている。現在は、次の4プログラムがある²。

- ・プログラムに沿った選択
(programinriktat val: IMV)
- ・職業イントロダクション
(yrkesintroduktion: IMY)
- ・個別(individuellt alternativ: IMA)
- ・言語イントロダクション
(språkintröduktion: IMS)

これら4つのプログラムの学校数及び学年別生徒数を表2に示す。以下では、統計や具体例を通して、各プログラムの特徴を検討する。

表2：IMの4プログラム

	学校数 (校)	1年生 (人)	2年生 (人)	3年生 (人)
IMA	390	8,240	2,715	1,369
IMV	663	4,263	2,634	1,630
IMY	452	4,422	2,532	1,787
IMS	316	6,289	2,774	1,784
IM合計	884	23,256	10,676	6,619

出典：SCB (2021) Gymnasiesolan-Elever-Riksnivå, Tabell 5 D: Elever på program och inriktning redovisade efter skolor och kön, läsåret 2020/21. をもとに筆者が作成

(1) プログラムに沿った選択 (IMV)

このプログラムは、「いずれかのナショナル・プログラムに向けた教育を行い、生徒ができるだけ早くそのプログラムに入れるようにする」

(Skollag, 17kap 3 § を筆者が訳出。以下、教育目標については同様) ことが目標である。入学を目指すナショナル・プログラムを明確に定めて、そこに入るために必要な基礎学校の教科を学習するとともに、希望するプログラムで学ぶ高校の科目も履修する。

プログラムに沿った選択に入るには成績に関する条件がある。その条件は、スウェーデン語に必ず合格しており、英語か数学のいずれかあるいは両方を含んで、合計6教科以上で合格していることである。つまり、職業プログラムであれば入学要件を満たすまであと1教科か2教科という、比較的入学要件に近い生徒のみに限定されている。限定的であるため、生徒数は他プログラムと比べて少ないが、設置学校数は多く、少人数で設定されていることが伺える(表2)。

実践上は、このプログラムの生徒が当該のナショナル・プログラムの生徒たちに混じって教育を受ける学校も多い。具体事例は、次の職業イントロダクションと合わせて後述する。

(2) 職業イントロダクション (IMY)

職業イントロダクションでは、「労働市場で自立したり、職業プログラムに入る土台となる、職業を念頭においた教育を受ける」ことが目標である。このプログラムは必ず同分野のナショナル・プログラムがある学校に開設され、設備や人的リソースを共通に利用する。

生徒は、入学要件を満たすための基礎学校教科の学習と並行して、高校の職業プログラムで提供されている職業教育を受けることができる。表2を見ると、他のIMプログラムよりも3年生の人数が多く、入学時からの生徒数の減少が少ない。1年か2年で入学要件を満たして、職業系のナショナル・プログラムに進学する生徒

もいるが、高校3年間で職業イントロダクションで学習して、直接社会に出て働く生徒も少なくないのである。また、在学中に他のIMプログラムから職業イントロダクションへ移動してくる生徒もいる。

2校の実例から、教育実践の様子を見ておきたい。まず、筆者が2019年に訪問した高校では、7種の職業プログラムを開設しており、これらに併設して同分野の「プログラムに沿った選択」と「職業イントロダクション」という2種類のIMプログラムを開設していた³⁾。「プログラムに沿った選択」では、基礎学校の最終成績で英語か数学のいずれか1教科のみが不合格だった生徒を受け入れている。その生徒は、日常的には同分野のナショナル・プログラムの生徒たちと一緒に、同じクラスで同じ科目を学ぶ。合格できていない英語か数学の授業時間だけ、高校の科目を履修する代わりに別教室で基礎学校レベルの学習をするが、その他の教育課程はすべてナショナル・プログラムの生徒と同じである。

生徒が「プログラムに沿った選択」に在籍できる期間は1年間で、この期間内に必要教科に合格し、ナショナル・プログラムへの入学要件を満たすことを目指す。無事入学要件を満たせば、ナショナル・プログラムの生徒になる。ただし、同じクラスに所属したまま、友人達とともに2年生になるので、日常生活に変化はほとんどない。変化するのは書類上の所属である。カリキュラムに関しては、通常のナショナル・プログラムの2年生が履修する科目をすべて履修しながら、1年生の時に履修できなかった数学か英語の基礎科目を追加で履修する。

一方、1年間で入学要件を満たせなかった生徒は、2年生進級時に「職業イントロダクション」に移る。IM内でのプログラムの変更である。ただしこの場合も、クラスメイトが変わることはない。職業イントロダクションの生徒も、ナショナル・プログラムの生徒と混ざって学習するためである。しかしながら、職業イントロダクションの生徒はナショナル・プログラムでの

履修科目をすべて履修する必要はなく、各生徒の状況に合わせて、履修する科目と履修しない科目を自由に決めることができる。教師からは、卒業後に就職しやすいように職業教育を受けることをアドバイスするという。多くの生徒は、職業に関する専門科目については、ナショナル・プログラムの生徒と同じ科目をすべて履修する。一方、ナショナル・プログラム共通の必修科目（スウェーデン語、数学、英語、宗教、歴史、保健体育、理科、社会）はあまり履修しない。履修しない科目の授業時間には、職業実習を行う。職業イントロダクションの生徒たちは卒業時に高校修了資格を得ることはできないが、科目履修や成績が記された証明書を受け取る。

また別の職業系の高校では、ナショナル・プログラムの生徒のクラスとは別に、「職業イントロダクション」の生徒のみのクラスが編成され、校内でも独自のエリアが設けられていた。生活場所や時間割は明確に区別されているものの、この学校でも、職業に関する専門科目ではナショナル・プログラムの生徒と IM の生徒が共同で学ぶことはある。そしてこの高校の「職業イントロダクション」のクラスは、2年進級時に生徒数が約2倍になる。他の学校の IM プログラムで1年間学んだが入学要件を満たせなかった生徒が転入してくるためである。また、入学要件は満たしたがナショナル・プログラムでは学習継続が困難と考えて自主的に「職業イントロダクション」を選択し、認められる生徒もいるという。生徒たちはこの学校で卒業を迎えて就職することを目指して、職業教育を受ける（本所、2021）。

これらの例のように、学校によって実際の運用は異なるが、職業イントロダクションには卒業後の就職を目指して高校在籍期間中ずっと学習を続ける生徒が多くいる。

（3）個別（IMA）

このプログラムでは、「職業系学科か、その他の継続教育か、労働市場に進む」ことが目標と

されている。

生徒は各自のニーズに応じてかなり柔軟にカリキュラムが編成できる。入学要件を満たすための基礎学校の教科を中心に、生徒の状況によって高校の科目を学習することも認められている。

生徒数は、1年生では個別プログラムが一番多いが、2年進級時の減少も最も大きく、3分の1ほどに減っている。これは、入学要件を満たしてナショナル・プログラムに入学する生徒がいる他、入学要件を満たせないまま職業イントロダクションに移る生徒もいるためである。

例えば、ある自治体では、IM の生徒は全員初年度には IMA で基礎学校の教科を中心に学習し、1年後に入学要件を満たせなければ、将来の進路を考えて職業イントロダクションで職業能力を身につけるよう勧めるという運用をしていた（本所、2021）。

（4）言語イントロダクション（IMS）

このプログラムは、スウェーデンに移住して数年である「ニューカマーの生徒にスウェーデン語を中心とした教育を行い、彼らが高校やその他の教育を受けられるようにする」ことを目標としている。

スウェーデンでは、2015年にシリアやアフガニスタンからの難民を多く受け入れ、この中には中学・高校生の年代の若者も多く含まれていた。とくに、高校入学前後である15-16歳の男子の庇護申請が顕著に多かった（Skolverket, 2018: 26）。そのため、2016年秋の言語イントロダクションへの入学生は倍増した。言語イントロダクションの1年生生徒数は、2014年秋には10,139人だったが、2015年秋に13,494人、2016年秋には25,738人になり、全学年合わせると、言語イントロダクションの生徒数はIM全体の6割、高校全体の1割にのぼった。言語イントロダクションは、ナショナル・プログラムを含めた高校全体の中で4番目に生徒数が多いプログラムになった。これ以来、調査や研究で言語

イントロダクションが取り上げられることはそれまでよりさらに増えたが、数年間の急増期を経て以前の規模に戻り、現在は個別プログラムに次ぐ生徒数でおちついている。

4. IMの教育に関する調査研究

IMの教育については、高校の他プログラムと同様に、学校教育庁(Skolverket)や学校監査庁(Skolinspektionen)による報告書が出されている。本節では、これらの報告書のレビューを通して、IMの教育の様子、そして成果と課題を明らかにする。

(1) 教育の実態に関する調査

学校監査庁は、教育の質改善のために教育実践の実地調査や関係者への聞き取りを行い、教育実践上の成果や課題を明らかにしている。IM創設の翌2012年に全国10コミュニティのIM職業イントロダクションと個別プログラムを対象に調査が行われ、次の2点が検討された(Skolinspektionen, 2013)。

- ①教育が各生徒の状況、ニーズ、目標に合うように計画されているか。
- ②各生徒が自分の目標に到達できるように教育が行われているか。つまり、教育計画と教育の個別化の実態についてである。

調査の結果、教育実践の質は学校によって大きな差異があると指摘された。報告書では、質の良し悪しを示すために、調査で実際にあった事例をもとにした4人のIM生徒の例を記している。例えば、個別プログラムに通うケ빈は、基礎学校レベルの3教科を履修している。数学は、6年生の教科書から始めて今は9年生の内容を扱っている。授業は個別化されているため、自分のレベルに合った学習をすることができる。授業中などに静かな空間が欲しくなったときには別室を利用することもできる。自己肯定感が低く、自分ができると思うより多くの学習を教師が勧めるのはストレスである。担任と学習について話すほか、スクール・ソーシャルワーカーに生活一般のことを話したり、進路アドバイザー

ザーに将来のことを話したりできるのは安心である。このケ빈の例は、授業での個別化や、教師以外の学校スタッフの連携、学習への動機付けといった点で、望ましい例として描かれている。

調査のまとめには、教育の質にとって重要な事柄として、以下の項目があげられた。

第一に、教育計画の個別化である。これはまず、生徒ごとに作られる「個人学習計画」に関連する。個人学習計画が不十分だったり、本人が内容を知らなかったりする学校があり、生徒本人が参加して計画できている学校は少ない。さらに、授業についても、生徒の状況、興味、関心を基にして計画されていることは少ない。ただし、少数ながら、各生徒の関心や目標に丁寧に合わせて授業を行なっている学校もある。

第二に、教師と生徒との関係である。とりわけ、メンター(mentor)と呼ばれる担任教師は、生徒が学習を諦めず継続するために重要な役割を果たす。

そして第三は、教師以外のスタッフによる生徒への学習支援である。スウェーデンの学校には、専門職として学業・職業の進路アドバイザー(studie- och yrkesvägledare)がいる他、生徒の保健管理を担うスタッフが生徒保健チームをつくっている。IMに通う生徒達は、学習面だけではなく心理的な困難を抱えていることも多く、こうしたスタッフの支援が学習継続には重要である。しかしながら多くの生徒は、進路ガイダンスの機会を適切に得られてはおらず、保健に関する情報も十分に持つてはいなかった。少数ながら進路ガイダンスを得られた生徒は、進路アドバイザーから、学習の動機付けや将来を見据えた学習計画の設定について、有意義な支援を得られたと述べていた。

最後に指摘されていたのは、上のような支援を受けながら可能になる、高校レベルの科目履修である。IMでは、各生徒に可能な範囲で一部の高校科目を履修することが認められている。しかし、学校にあるリソースの関係や授業担当

教師の反対のために、実際に履修できている生徒は少ないことが明らかにされた。IM とナショナル・プログラムとの担当校長が異なるために、職業イントロダクションの生徒が十分に職業科目を履修できていない例すらあった。

このように、IM は設置初期には、理念と現実の差異や、実践上の不十分さが多く指摘されていた。教育の個別化や、生徒のニーズへの対応を目指しながらも、実際には運営上の困難が大きかったといえる。

(2) IM の生徒の属性や進路に関する調査

学校教育庁は、言語イントロダクション以外の IM のプログラムの 2012 年入学生 9,540 人を 5 年間追跡調査し、生徒の特徴や学習の様子、進路などを調査した (Skolverket, 2019a)。

ナショナル・プログラムの生徒と比較した IM の生徒の特徴として、男子の割合が高く (ナショナル・プログラムは約 50%, IM は約 57%), 親の学歴が高卒以下の生徒の割合が高く (ナショナル・プログラムは約 48%, IM は約 78%), 自分または両親が外国生まれの生徒の割合が高い (ナショナル・プログラムは約 18%, IM は約 36%) ことが示された。

基礎学校の最終成績について、最も不合格の生徒が多い教科は数学で、IM に来る生徒全体の約 8 割が不合格である (英語は約 6 割, スウェーデン語は約 5 割)。IM 内でもプログラムによって生徒の成績は大きく異なり、「プログラムに沿った選択」の生徒は比較的入学要件に近く、「個別プログラム」には成績が低い生徒が多い。特に顕著なのは、成績がまったくない生徒、つまり、基礎学校を長期欠席していたなどの理由から成績がつけられなかった生徒で、こうした生徒は個別プログラムに多く、その 25-30% を占める (IM 全体では 15-19%)。一方、約 3% の生徒は、入学要件を満たしているものの、特別な事情があると学校設置者に認められて IM で学習している。

高校での学習成果については、IM での学習を

始めてから 5 年後には約 56% の生徒がナショナル・プログラムに移り、約 22% の生徒が高校修了資格を得ている。ナショナル・プログラムに移る生徒の 83% が職業プログラムに、17% が大学準備プログラムに移っている。

IM 入学の 5 年後には、約 74% の生徒が学業か職業に就いている (ナショナル・プログラムは 93%)。とくに、途中でナショナル・プログラムに移った生徒や、高校修了資格を得た生徒のほうがその割合は高い。そして、プログラム別に見ると、個別プログラムで低い。個別プログラムは成績が低い入学生が多いことから教育の困難さが推測される。ただし、同様に入学生の成績が高くない職業イントロダクションは、卒業後に半数以上の生徒が何らかの職についており、将来の職業への方向づけが明確であることや、実習などが、生徒の学習の動機づけになっていると推測されている。なお、卒業後に就職した生徒の職業分野については、どの IM プログラムからも、福祉・看護分野での仕事が多い。

まとめとして、IM は全体的にはほぼ期待通りの機能を果たしていると評価されている。しかし、個別プログラムには課題が大きいと指摘されている。

職業イントロダクションに関しては、高校職業教育の質向上に関する施策の延長で様々な取り組みが行われたり、学校教育庁から独自の調査やハンドブックが出されたりしている (Skolverket, 2017a, 2017b, 2021)。2015 年には、職業イントロダクションを卒業後就職した若者へのインタビューから、就職に重要な要素が抽出された (Skolverket, 2015)。結果として提示されたのは、職業教育が「現実とのつながり」をもって、各生徒のニーズに合わせて「個別化」されており、教育課程に「職場での長期実習」があり、「実習で成長の実感」が感じられること、そしてそうした学習を支える「教師との関係性」が土台にある等の要素だった。

(3) 言語イントロダクションについての調査近年とくに多くの報告書が出されているのは、言語イントロダクションである。この背景には、前述した言語イントロダクションの急拡大に伴う人的・物的リソースの不足や混乱があった。

若者男子の庇護申請者の多くは、両親を伴わず「一人で来た子供・若者 (ensamkommande barn och unga)」であり、居住許可が得られていない子供も少なくなかった。このような生徒に対して、学校は学習面のみならず、心身のヘルスケアや生活面でも様々な配慮が求められた。こうした状況下での学校の様子について、学校監査庁は 2016 年に全国 42 校の言語イントロダクションを対象に調査している (Skolinspektionen, 2017)。

この調査では、文書資料とインタビューを通して、次の 3 点が検討された。①教育のスピード、範囲、内容が、生徒の学習履歴や教育ニーズに応じて柔軟に組み立てられているか。②将来の教育・職業の選択をサポートするために、生徒は教育の一環として進路ガイダンスを受けているか。③学校は、生徒の心身の健康増進・予防・改善に、専門家と連携して取り組んでいるか。これらの問いからは、生徒に合わせた教育の個別化という学習面のみでなく、進路ガイダンスやヘルスケアといった生活面・進路面でのサポートが重視されているのがわかる。

調査結果からは、予想されたことではあるが、各地の学校での混乱や困難が改めて明示された。多くの自治体が努力して様々な取り組みを行っていることは認められるが、課題はまだ多く残っていた。調査対象の 42 校のうち、37 校は上述 3 点の中に改善すべき分野があり、その内 30 校は 3 分野すべてに課題があった。例えば、生徒の多様な背景や教育ニーズを鑑みずにグループをつくって共通の教育を常に受けさせていたり、スウェーデン語の学習ばかりで他教科の学習が不十分だったり、生徒が既に身につけている教科の学力を診断せずに、簡単すぎる科目を履修させていたりした。保障されるべき母

語教育や母語での学習サポートを行う教師が不足していることも多かった。

言語イントロダクションに入る若者は、決して各教科の学力が低いわけではなく、スウェーデン語ができないために他の教科の能力を適切に認められていない場合がある。しかし、教師や進路指導スタッフは生徒の能力を低く見積りがちで、校長による統制やフォローアップは不十分な場合が多いことが示された。

ただし、言語イントロダクションでうまく教育の個別化を進めている学校もあり、報告書ではこうした事例が積極的に提示された。入学時に各教科の能力を診断してから学習計画を立てたり、スウェーデン語の他に多くの教科を履修して言語と教科の両方を学べるようにしたり、授業以外の学習サポートの場を提供している学校があった。具体事例を参考にして、教育を各生徒のニーズに合わせることが強調された。

学校教育庁も、言語イントロダクションについていくつかの報告書を出している (Skolverket, 2016, 2017c, 2018)。2018 年の報告書では、2011 年と 2012 年に言語イントロダクションに入学した生徒達の 4 年間の追跡調査に加えて、2017 年から 2018 年 2 月までに実施されたアンケート結果が分析された (Skolverket, 2018)。

生徒の追跡調査では、言語イントロダクション入学生の 36%は高校在籍中に他の IM に移り、別の 23%はナショナル・プログラムに移っていることが示された。他の IM に移った後にナショナル・プログラムに移った人を合わせると、36%の生徒がナショナル・プログラムで学んでいた。また、32%は言語イントロダクションから直接成人教育に進学していた。こうしたプログラムや学校間の移動の中で、接続や連携のシステムが不十分であることが指摘された。とくに、言語イントロダクションから成人教育に移るときの情報提供や連携が不十分だった。

また、アンケート結果からも、生徒の進学や転出入などに課題があることが示された。コミュニケーション内での高校やプログラムの変更は比較

的容易ながら、コミュニケーションを超えると、システムの違いなど多くの困難があった。進学や転入について、もっと効率的な仕組みを整えることが必要とされた。

以上のように、IMの教育においては、生徒の多様性に対応する個別化が理想とされたが、実際の実施は容易ではなく、とくに初期には期待と乖離した現実の姿があった。現在もなお、様々な問題に対応する実践上の困難さは多く指摘されている。次節では、IMの教育における実践上の課題に対して、どのように改善が図られているのかを検討する。

5. IMの教育改善

(1) カリキュラムの規定

カリキュラムの規定に関する変更として、2018年にIMの最低保障授業時間数が定められた。保障授業時間数は、ナショナル・プログラムには以前から定められており、現在は職業プログラムでは3年間で合計2430時間以上、大学準備プログラムでは合計2180時間以上の授業が行われることとされている。しかし、IMには授業時間に関する規定がなく、ナショナル・プログラム同様の「フルタイムの学習(heltidsstudier)に相当する量を実施する」(Skollag, 17 kap 6 §)という規定があるのみだった。フルタイムの学習が具体的に何時間をさすのか明示されていなかったのである。

学校教育庁の調査では、プログラムや個人によって週15時間から25時間と大きな差があることが示された(Skolverket, 2015)。IMは生徒の多様なニーズに応じることを目的としているため、生徒の状況に応じて授業時間に差が出ることは当然でもある。しかし、希望する教育が受けられないために短い授業時間になっている場合もあることが問題視され、生徒に特別な事情がある場合を除いて、週に23時間以上の授業を提供することとされた(Skollag, 17 kap. 6 §)。

また、2019年からは、言語イントロダクシ

ョンの生徒に対して、入学時に教科の学力を診断することが義務付けられ、同時に、生徒の学習をスウェーデン語中心にするのは短期間にとどめ、できるだけ将来の教育に必要なその他の教科の学習を行うことが明示された(gymnasieförordningen, 6 kap. 8 §)。

(2) 教育の開発を促す多面的なアプローチ

カリキュラムに関する規定の導入に加え、近年、各学校でIMの教育をより良いものにしていく取り組みの推進が、学校教育庁によって多面的なアプローチで行われている。

2018年には、各学校での教育計画や教育実践の開発を推進することを目指して、いくつかのパイロット校に学校教育庁のIM開発担当者(IM-utvecklare)が派遣された。この開発担当者は、パイロット校での教育実践に対してアドバイスすることを目的としていたのではない。そうではなく、学校現場の課題や困難さを把握し、理解することを目指していた。パイロット校での実践に携わることで、学校現場の実態を理解して必要な支援を検討し、今後多くの人々が各地域や全国レベルでIMの開発に取り組めるような支援の形式や研修を作成する計画だった(Skolverket, 2019b)。

このIM開発担当者とパイロット校での取り組みを経て認識されたのは、各IMが置かれている異なる状況や多様な生徒の実態に応じた個別の課題があるとともに、多くの学校に共通する一般的な課題があることだった。例えば、計画的な教育開発の取り組みに関する知識や実践が不十分だったり、IMに関する法規について理解が不完全だったりするといった課題である。こうした認識から、一般的な課題への対応と、個別の状況に合わせた対応との両方を可能にするように、相互に関連する3つの支援策が計画・実施された(Skolverket, 2021)。

第一には、経験や知識を共有し効果的な取り組みの具体例を知る機会の設定である。2018年に、全国規模のカンファレンスをひらいて議論

の場が設けられ、合計515人の参加があった。第二には、一般的な教育開発のプロセスを提示し、支援するオンライン研修の開発である。研修プログラムは2019年12月に公開され、2021年1月までに877人が登録・履修した。そして第三には、開発のプロセスを相互に支えるネットワークづくりである。2020年に2つ、2021年に1つのネットワークが作られ、それぞれ4回の会合がひらかれた。ネットワークの参加者は校長やプログラム長、開発担当者、地方自治体の担当者などで、合計160人にのぼった。

以下では、オンライン研修とネットワークづくりの内容をより詳細に検討する。

(3) オンライン研修

オンライン研修は、対面での研修よりも長期にわたって、多くの人々に気軽に取り組んでもらうことができる。この利点を活かして、IMの開発や教育マネジメントの一般的なプロセスを学べるオンライン研修が開発された。タイトルは、「高校イントロダクション・プログラムを開発しよう：マネジメント」である（Skolverket, 2019c）。主な対象者は、自治体の教育開発担当者、学校設置者、校長、その他IM開発に取り組む関係者である。ただし、ウェブで登録すれば誰でも無料で研修を受けることができる。そして研修は、全体を通して学ぶだけではなく、必要な部分を取り出して学習したり利用したりすることもできる。

研修は5部構成で、各部は「学習パート」と「プロセス支援パート」に分かれている。学習パートは、主に個人で行うオンデマンド学習である。動画を視聴し、テキストを読み、音声聞いて、要点やキーワードを学習する。各部の学習パートの終わりには振り返りの質問がついている。

プロセス支援パートには、実際に開発に取り組む関係者がグループで議論する際に使用できるスライド資料、議論のテーマの例、ガイダンスがついている。このプロセス支援パートの構

成からもわかるように、研修は個人で行う学習のみでは終わらず、同僚、地域の人、そして関係者などと議論し、共同で学習し、共に実践することを前提として作られている。

オンライン研修のウェブサイトには、研修時間は約5時間と記されており、5部構成の各部が1時間であると推測されるが、各部には事前準備としての学習パートと、議論の機会としてのプロセス支援パートがあり、全体としては一定期間をあげながら5回のミーティングをもつことが想定されている。そして研修の中には、実際の取り組みを振り返ったり議論をする機会や、研修を受けて実際にやってみることも盛り込まれているため、研修の成果を生かすには、実践を行いながら複数回かけて共同で学ぶことが必要になる。

研修の各部の内容は次の通りである。

第1部 IMのマネジメント

第2部 エフェクト・チェーンを用いて計画する

第3部 IMの教育計画

第4部 個人学習計画

第5部 生徒の学習向上のフォローアップ

第1部では、研修の全体像を把握し、IMのマネジメントの特徴や教育開発の要点を学ぶ。全国共通の目標やカリキュラムの枠組みを持たないIMにおいては、学校の教育計画や生徒の個人学習計画、そして生徒の学力向上のフォローアップが一層重要であることが強調され、これらの関連が自転車をメタファーとして説明されている。すなわち、バランスを取り安定性を保つ後輪の役目を「学校の教育計画」が担い、各生徒の目標に向かって教育を方向づけるハンドルの役目を果たすのが「生徒の個人学習計画」である。そして、実際にその方向に向かって自転車を進める前輪の役目を担うのが、「生徒の学力向上のフォローアップ」である。

このように、相互に関連して教育を進める3つの役割をわかりやすく示し、その開発には、自治体、校長、教師の対話が必要であること、質的・量的なデータ分析から現状把握を行い、

目標に照らし合わせて開発ニーズを特定することが必要であると記されている。

第2部の課題は、エフェクト・チェーンというモデルを用いて、開発計画の全体像を把握しながら計画することである。エフェクト・チェーンは、開発プロセスを4段階に整理して計画するモデルである。まず、最も実現したいがすぐには評価しにくい「長期的な成果」の明確化から始めて、それを実現するためにより短期で達成すべき「結果」を明示し、その結果に至るために実施する「取り組み」を整理し、取り組みを実施するために必要な「リソース」を明らかにする。これらの関連性を整理することで、長期的な視点を共有したり、開発過程で生じる複数の変化の関係や、開発に必要な要素などを明示化したりできる。実際に計画する際は、一方向ではなく行きつ戻りつしながら、現実的に、妥当性を検討して、リソースを鑑みながら考える。これは計画であって、実際には予期せぬ結果になったり、期待通り実施できなかつたりするが、重要なことは、参加者全員が開発プロセスの全体像を理解し、開発の取り組みを振り返り評価する際や計画を変更するときに立ち戻る共通の土台をもっておくことである。

第3部では、IMの教育計画の役割と内容を理解し、実際の計画を見直したり計画したりする。IMの教育課程は個別対応できる柔軟性が特徴だが、その基盤には明確で確固とした教育計画が必要であることが強調されている。長期的な教育計画を立てることで、学校設置者は教育活動をフォローアップしやすくなり、校長や教師はそれに沿って教育実践を具体的に開発したり評価したりでき、また、各生徒の個別学習計画を計画するときの方向性が定められる。

教育計画では、IMの教育全体の目標、期間、主な内容を定める。また、IM入学前の学校との連携（とくに、生徒がこれまでに履修・修得した科目の確認）や、IM卒業後の学校との連携、ニューカマーの生徒の言語と教科の能力のフォローアップ、個人学習計画の目標に沿った学習

到達度の実際の変化をフォローアップする指標の開発などの事項も、書いておくことが望ましい。

教育計画に関しては、計画を立てる際に選択すべき項目を具体例とともにまとめたガイドブックが学校教育庁から発行されている（Skolverket, 2020）。

第4部は、個人学習計画である。IMに限らず高校生は全員、個人学習計画を作成することになっており、その作成と実施は校長の責任である。個人学習計画は、生徒が自分の受ける教育について考える機会になり、教育目標に至る道を計画するのに役立つ。それのみではなく、教師にとっては、授業を計画し、特別な支援や配慮の必要性を読み取る機会となり、自分自身の授業を反省し評価するための資料となる。校長は、教育実践上のニーズを分析し、必要なリソースを計画し、学校の活動を省みて評価する際に用いる。このように複数の役割を持つ重要なものであることが強調されている。

個人学習計画が含む項目として、次のような事柄が挙げられている。

- ・教育の目標と期間
 - ・カリキュラム
 - ・(必要な場合) 教育する職業分野
 - ・履修する科目
 - ・(必要な場合) 履修する基礎学校教科
 - ・生徒の学力向上に資する職業教育、実習、その他の活動
- その他、以下のような項目を含むこともできる。
- ・IMを終えた後に受ける教育
 - ・合格するまでの生徒の学力向上
 - ・ニューカマーの生徒について、多様な教科での言語上達と学力向上
 - ・学校教育庁の評価資料などを使った能力診断と継続的な評価の情報
 - ・母語やスウェーデン語での学習支援をはじめとする特別な配慮
 - ・動機付け、計画の構成、指導法などにおける特別な対応

- ・生徒の出席率
- ・進路カウンセラーとの面談の記録

以上のような項目で作成された個人学習計画は、必要に応じて改訂される。また生徒は、計画し学習し始めた個人学習計画については、最後まで教育を受ける権利がある。

そして第5部では、生徒の学力向上のフォローアップの重要性、考え方、方法などを学ぶ。とくに、合格には至らないが学力を向上させた生徒の変化に注目することが促されている。成績のみを見ていると、IMの生徒はなかなか認められにくい。学習開始時点からの変化や、途中のプロセスを、個人学習計画に照らし合わせながら評価し、合格に至らない科目については、成績ではなく記述での評価を記録する。最終的には成績証明書や状況報告書を作成する。

(4) ネットワークでの交流と議論

オンライン研修での一般的な事柄の理解や取り組みの開始を土台として、各学校の状況に適した支援を提供するために設定されたのが、IM学校設置者や校長のネットワークである。ネットワークへの参加者はウェブ上で広く募集され、条件に合う参加者が決定された。

ネットワークの活動は約8ヶ月続き、この間に4回の会合がある。活動の開始時に、学校教育庁の担当者がネットワーク参加者と個人面談を行い、開発ニーズを聞き取り、これをもとにネットワークの活動が計画される。4回の会合では、参加者同士が経験を紹介し議論し合い、インスピレーションを得たり知見を広めたりする。以下では、各回のテーマと、論点の例を示す(Skolverket, 2021)

第1回目の会合では、開発の全体像を確認した上で、IMのマネジメントと教育計画に焦点が当てられた。論点は例えば、「現在あなたの仕事において、教育計画、個人学習計画、学力向上のフォローアップという3要素は、つながっているか?」「うまくいっている点/開発する必要がある点は何か?」といったものがある。

第2回目には、個人学習計画が取り上げられ、役割や機能を確認した上で、具体的な中身が検討された。「教育計画と個人学習計画とのつながりを強めるにはどうすればいいか?」「現在用いている個人学習計画にはどんな項目があるか?生徒の教育目標達成に向けた活動にどう役立っているか?」などが議論された。

第3回目のテーマは、合格までの生徒の学力向上フォローアップだった。「成績にあらわれない生徒の学力向上を、校長や学校設置者はどのように知ることができるか?」「誰が何を知る必要があるのか?」「生徒の個人学習計画は、どのように利用できるか?」などが議論された。

最後の会合は、開発の計画がテーマとされた。開発の全体像とその重要性を再度確認し、関係者が共同してフォローアップと評価、改善ができるようにする。「教育計画、個別学習計画、フォローアップという3段階を適切に工夫して計画する利点は何か?」などの議論が行われた。

各会合でのテーマはオンライン研修と同様で、ネットワークでは参加者が実例を紹介して意見交換を行なう。会合では毎回、参加者からのフィードバックを学校教育庁の担当者が確認し、参加者のニーズに合わせて議論の内容などを調整する。また、必要に応じて個別面談の機会も設ける。明確な方向づけを持ちながら、対話と個別のニーズを重視したネットワークの活動は、それ自体が、参加者が各自自治体や学校で開発に取り組む際の良いモデルにもなっているだろう。

以上のように、IMの教育については、個別化できる柔軟性を保ちつつ質を保障するために、近年、最低授業時間数などの規定を導入すると同時に、カンファレンス、オンライン研修、ネットワークの構築など、連続性をもちながら人々との対話と協働を促す研修が行われ、各学校での教育開発の推進が図られている。

6. おわりに

本稿では、高校生の学力の多様性に応じるIMの教育について、教育課程や教育方法、近年認

められている成果と課題、および課題に対する挑戦について検討した。

IM は、高校入学に求められる学力水準を満たさない生徒に対して、補充学習を行うことを第一の目標に掲げながら、各生徒に将来の生活や進路を意識させ、個別のニーズに応じて学習機会を与えようとしていた。4種類のプログラムを設けることで、入学生に自らの学習やその先の進路を考える方向性を与えると同時に、教育の個別化を旨としながらも大まかな方向性をもって教育を計画することを可能にしていた。

調査では、創設当初には実践上の課題が累積していたものの、近年の生徒の追跡調査ではほぼ期待通りの機能を果たしていると評価されていた。ただし、多様な生徒のニーズに答える困難さは残っており、IM への入学・転入やIM からの進学・転出の際の情報提供の不十分さなど、具体的な課題も指摘されていた。

こうした課題に対しては、カリキュラムや実践上のガイドラインを設定する他、多面的なアプローチで各学校での教育開発が推進されていた。とくに、柔軟な教育実践の土台となる明確な教育計画やマネジメントについての研修では、協働や対話が強調され、多様な関係者が参加し考える工夫が織り込まれていた。

教育の個別化は、理念は納得できても、実際に多様な生徒を目の前にして実践するには非常に困難が多い。IM では、制度・組織・個人のそれぞれのレベルで、困難を明確にし、関係者が協働しながらひとつずつ乗り越え、教育を開発していく試行錯誤を行っていた。時代を反映して異なる困難がもたらされ、異なる生徒のニーズに対応するため、その教育実践は常に試行錯誤が続くのだろう。本稿で明らかにした全体的な成果や課題、そして取り組みは、今後日本でも多様な高校教育を構想する上で示唆深い。今後の課題として、より具体的な教育実践における成果や課題、そして挑戦の検討をあげておく。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 JP18K13051,

JP19H00618 の助成を受けたものです。

<引用・参考文献>

- 中央教育審議会初等中等教育分科会高等学校教育部会 (2014) 『初等中等教育分科会高等学校教育部会審議まとめ～高校教育の質の確保・向上に向けて～』
- 石田祥代・松田弥花・本所恵・渡邊あや・是永かな子 (2021) 「インクルーシブ教育からみえた義務教育から後期中等教育への移行とその支援」『北ヨーロッパ研究』第 17 巻, 37-51 頁
- 林寛平・本所恵 (2021) 「スウェーデンの離学予防・復学支援施策」園山大祐編『学校を離れる若者たち—ヨーロッパの教育政策にみる早期離学と進路保障』ナカニシヤ出版, 156-172 頁
- 本所恵 (2016) 『スウェーデンにおける高校の教育課程改革—専門性に結び付いた共通性の模索』新評論
- 本所恵 (2021) 「スウェーデン『万人のための高校』における教育と職業」教育目標評価学会『〈つながる・はたらく・おさめる〉の教育学—社会変動と教育目標』日本標準, 134-147 頁
- Gymnasieförordning (2010:2039)
- Gymnasieutredningen (2016) *En gymnasieutbildning för alla: Åtgärder för att alla unga ska påbörja och fullfölja en gymnasieutbildning. SOU 2016:77*
- SCB (2021) *Gymnasiesolan—Elever—Riksnivå, Tabell 5 D: Elever på program och inriktning redovisade efter skolår och kön, läsåret 2020/21.*
- Skollag (2010:800)
- Skolinspektionen (2013) *Utbildningen på introduktionsprogrammen i gymnasieskolan: En kvalitetsgranskning av programmen yrkesintroduktion och individuellt alternativ.*
- Skolinspektionen (2017) *Språkintrödn i*

gymnasieskolan.

Skolverket (2014) *Introduktionsprogram.*

Skolverket (2015) *Elevröster om yrkesintroduktion som en väg till ett arbete.*

Skolverket (2015) *Undervisningstid och heltidsstudier i gymnasieskolan.*

Skolverket (2016) *Språkintröduktion.*

Skolverket (2017a) *Introduktionsprogrammet yrkesintroduktion.*

Skolverket (2017b) *Yrkesintroduktion av varierande längd: Modeller för att organisera utbildningen.*

Skolverket (2017c) *Uppföljning av språkintröduktion. Beskrivande statistik på nationell nivå och exempel på hur nyanlända elever kan ges möjlighet att använda sitt modersmål i undervisningen.*

Skolverket (2018) *Uppföljning av språkintröduktion: Beskrivande statistik på nationell nivå och nyanlända elevers övergångar till och från språkintröduktion.*

Skolverket (2019a) *Introduktionsprogram, eleverna och deras sysselsättning efteråt.*

Skolverket (2019b) *Delredovisning av uppdrag Stöd för utveckling av introduktionsprogram.*

Skolverket (2019c) *Utveckla gymnasieskolans i ntroduktionsprogram- styrning. (オンライン研修) <https://www.skolverket.se/skolutveckling/kurser-och-utbildningar/utveckla-gymnasieskolans-introduktionsprogram---styrning> (2021年9月15日確認)*

Skolverket (2020) *Plan för utbildningar på introduktionsprogram.*

Skolverket (2021) *Stöd för utveckling av introduktionsprogram.*

本項では以下、これら2教科をまとめて「スウェーデン語」と表記している。

- 2 IMが設定された2011年には5種類のプログラムが用意されていたが、2019年秋に「準備教育」と「プログラムに沿った個人選択」が統合されて「プログラムに沿った選択」になり、合計4プログラムになった。なお、厳密にはこれら4課程それぞれの名称に「プログラム」という語はないが、統計上は他プログラムと同等の扱いを受けるため、本稿では「プログラム」と記している。
- 3 Praktiska gymnasiet, Uppsala. 2019年1月28日訪問。IM担当 Clara Norlin氏へのインタビューによる。なお、訪問は脚注iiに記したIMのプログラム改編前に行なったため、訪問時には「プログラムに沿った個人選択」という名称だった。2019年秋から「プログラムに沿った選択」に名称が変更したが、教育課程をはじめとして、この高校での運用に変化はない。

注

- 1 スウェーデン語以外を母語とする生徒は、希望すれば「第二言語としてのスウェーデン語」という教科を履修でき、「スウェーデン語」と同等の扱いを受けることができる。